

イスラエルにおけるユダヤ人入植の地域的展開

小 池 とみ子

問題の所在

激動の地、中東をめぐる多くのジャーナリストの報告が出されている。しかし、パレスチナの地にユダヤ人入植がどのように進められたか、地域的視点に立つものはきわめて少ない。本論は、パレスチナ・アラブ社会にユダヤ人が入植、アラブ人を排除しながら、領土を拡大してきた経緯を、パレスチナという地域における「場所をめぐる争い」としてユダヤ人入植の地域的展開に注目して検討する。

現在の激しい紛争が起こる直前の1999年の夏、短期間ながらイスラエルを訪れる機会を得た。本論の分析の方法としては現地で得た資料と日本で出版されている書籍それに現地での見聞を加えて推論をすすめる。イスラエル地誌に新たな視点を加える一試論を提示することを目的としている。

I. パレスチナへのユダヤ人入植

1. イスラエル概観

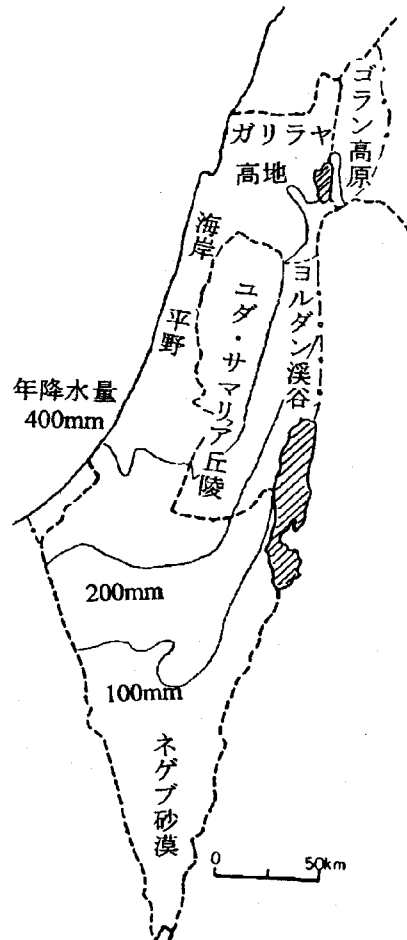
1) イスラエルの国土—自然環境と農業景觀

イスラエルは地中海の東端に位置し、サハラ砂漠・アラビア砂漠に囲まれた中東にあって海岸沿いから北部にかけては地中海性気候に属する。この地はイスラエル建国まではパレスチナと呼ばれ、旧約聖書には「乳と蜜の流れるカナンの地」として登場する。

イスラエルの国土は第三次中東戦争前の休戦ラインでとらえれば2.1万km²である。第三次中東戦争以来占領しているヨルダン川西岸地区の面積は約5800 km²、ガザ地区は362 km²、そしてゴラン高原は1176 km²である。

国土を地形区分すると4つの地域に分けられる(第1図)。第1はレバノン国境からガザ地区まで続く地中海沿岸部海岸平野である。テルアビブやハイファなど工業都市があり、柑橘類栽培農業地帯の中心である。第2は中央丘陵地帯で、北部の

ガリラヤ高地からヨルダン川西岸地区のユダ・サマリア丘陵に続き、南部のネゲブへとつながっている。この丘陵は褶曲運動によって出来た中生代白亜紀の石灰岩から成る。この丘陵の稜線沿いにヘブロン・エルサレム・ナブルスなどの都市が並んでいる。西斜面には果樹やオリーブ、冬野菜や花卉栽培が見られる。第3はヨルダン地溝地帯で標高-212 mのガリラヤ湖からヨルダン川を経て-400 mの死海へとつながり、さらに南のアカ



第1図 自然環境(占領地を含む)

Atlas of Israel より筆者作成

バ湾に達する。ヨルダン溪谷では豊富な地下水と肥沃な沖積土壌により、なつめやしやぶどう、柑橘類、冬野菜、綿花などが栽培されている。第4は南部のネゲブ乾燥地帯で、シナイ半島の砂漠へと続いている。ネゲブ地方の北部ではかつては小麦・大麦の乾地農業が行われてきたが、最近是国家事業による水利施設の完成により小麦や野菜・花・メロン・スイカなどの栽培が見られるようになった。

気候からみると海岸平野部（ガザ以南はステップ）から中央丘陵地帯、そしてガリラヤ地方までは地中海性気候である（年降水量400 mm以下）。中央丘陵地帯東側からヨルダン川流域および死海以南と、ネゲブ乾燥地帯は年降水量200 mm以下のステップないし砂漠となっている。

2) イスラエルにおける人口の増加

1922年イギリスの委任統治が始まった当時、パレスチナ地域の人口は、約67万、うちアラブ人が61万、ユダヤ人は6万であった。その後ユダヤ人のパレスチナへの入植がすすみ、1947年国連分割案が出された時点で、パレスチナの人口は193.5万、うち、ユダヤ人60.8万、アラブ人132.7万となっていた（広河1987：33, 45）。1948年の独立後のイスラエルの人口は第1表に見るように、87.3万から598.7万となった。その大部分はユダヤ人の入植による増加によるものである。

イスラエルの人口約590万（1997）のうち、宗教別に見ると、ユダヤ教徒470万人、イスラム教徒87万人、キリスト教徒12.6万人、ドルーズ9.7万人、これに宗教では分類できない人口約10.8万が加わる。これを「民族」という視点で見るとユダヤ人が約470万人（80%）、パレスチナ人が約110万人（20%）となる。ドルーズはイスラムから派生した宗派であるが、特有の教義を持ち、イスラエルでは兵役にも就いている（1956年以降）

第1表 イスラエルの人口

年次	人口(人)
1948	872,700
1955	1,789,100
1968	2,841,100
1990	4,821,700
1998	5,987,000

（『朝日新聞』1999.6.13付）

のでパレスチナ人とは別のカテゴリーに入れる場合もある（立山2000：203-204）。

2. イスラエル建国まで

1) ユダヤ人入植以前のパレスチナの土地と人々
ユダヤ人の離散のあと、7世紀になってアラブ人がパレスチナの地にやってきた。古代イスラエル人がヨルダン川のいずれかの側の丘の上に住み、ヨルダン溪谷そのものは農地としていたように、アラブ人もまたマラリアやベドウィンの襲撃を避けるために、丘陵地帯に住み、農作物の植え付けや収穫のためにヨルダン溪谷や海岸沿いの平地に降りて行く生活を選んだ。19世紀オスマントルク時代になって、パレスチナの治安状態が改善されるにつれ、ナブルス丘陵の住民たちは、西方の平地に入植するようになり、19世紀末にはこの入植地は村落の体裁を整えるようになった（ギルモア1985：36）。

パレスチナ・アラブの約85%はイスラム教多数派のスニー派であった。都市部に住み続けていたユダヤ教徒（1870以前のユダヤ人集落：エルサレム・ヤッファ・チベリアス・サッファ）やキリスト教徒と異なり、イスラム教徒の大部分は農村部に住んでいた。北部シリアと違ってパレスチナには大土地所有はあまりみられなかった。少数の地主がいたほかは、パレスチナの土地の大部分は、小規模自作農地に分割され、農民の半数は、3 haほどの耕地しかもたず、食べてゆくのが精いっぱいだった。そして農家の約1/3は土地なしの小作農であった（ギルモア1985：28-33）。

2) シオニズムとユダヤ人のパレスチナ入植

パレスチナへの移民の第一波は、農奴解放後のロシア社会の混乱の中で1882年ユダヤ人虐殺（ポグロム）がおこり、ユダヤ人の大規模なロシア脱出がおこったことから始まった（第2表）。移民の流れは、一つは新天地アメリカへ、もう一つはパレスチナへ向かった。パレスチナで人々はヨーロッパのユダヤ人富豪ロスチャイルド卿の支援を受けて土地を買って開拓し、北部地方を中心に約20のコロニーを作った。新移民はアラブの農民社会を大きく揺さぶることになった。パレスチナにすでに住みついていたスファラディー（15世紀末スペイン・ポルトガルから追放され、オランダ・イタリアなどヨーロッパ各地に住み着き、

第2表 パレスチナへのユダヤ人移民数

年代	移民数(人)
1882-1914	55,000-70,000
1919-1925	83,461
1926-1930	29,260
1931-1935	165,704
1936-1940	96,737
1941-1945	49,672
1946-1948.5.14	56,467
合計	536,300-551,300

(立山 2000: 36)

のちパレスチナの地にやってきたユダヤ人、約3万人)は一貫してアラブ人と仲良く暮らしてきたが、欧州から入植してきたアシュケナジー(中欧・東欧出身のユダヤ人、当時約2-3万人)は既存社会と融合しようとしなかった。彼らはアラビア語を学ぼうとせず、また、アラブ人の商店や労働者をボイコットする原則を固守していた(ギルモア 1985: 56, 大岩川 1983: 244, レヴィン 1994: 62)。

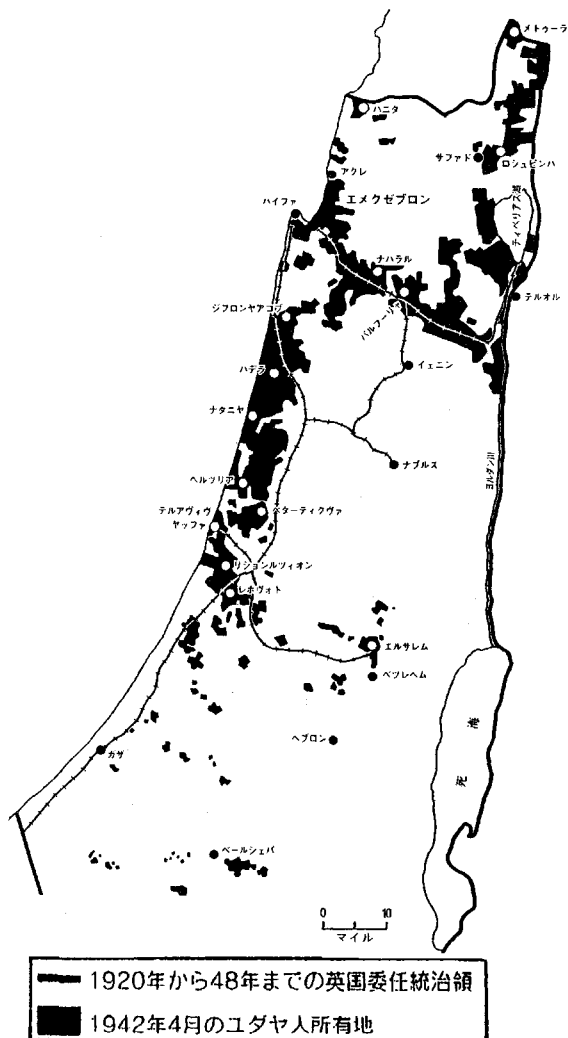
テオドル・ヘルツェルの「ユダヤ人国家」が出版されたのは1896年であった。「ユダヤ人の民族的郷土をシオンの地に」というシオニズム運動はハイム・ワイツマンに引き継がれ、彼は1901年「ユダヤ民族基金」を設立した。この基金を通じて世界各地のユダヤ人からの資金が集められ、パレスチナでの土地購入がすすめられたのである。

1903年、ロシアで革命運動が活発になると再びユダヤ人大殺戮が起こった。ロシアのユダヤ人労働者は「シオンの労働者」を組織し、彼らの運動は第二波移民に発展していった。彼等は社会主義的理想のもとにキブツ運動を組織、「土地への回帰」「ユダヤ人による労働」を掲げてパレスチナへ入植した。彼らは東欧系実践主義シオニストの中心勢力でその数は3.5-4万人であった。

1917年イギリスはユダヤ人の第一次大戦におけるの協力を得るために「バルフォア宣言」を出した。それは1915年のアラブとの約束「マクマホン書簡」と矛盾するもので、パレスチナ・アラブの悲劇を引き起こすことになった。

3) ユダヤ人による土地取得の舞台(第2図)

1914年の時点で、ユダヤ人の農村への入植者は1.2万人、取得地は4.5万haといわれている。



第2図 1942年までのパレスチナにおける
ユダヤ人所有地
ギルバート 2000: 127

当時のパレスチナの全耕地を90万haとするとその5%である。これが、1929年には約10万ha、耕地の約10%, 1939年には20万haにまで増加した(富岡 1993: 130)。

ユダヤ人への土地売却の主舞台は、当初パレスチナ北部の肥沃な峡谷地帯(イスラエルの谷)と地中海沿岸の平野だった。1920年代に入ると、シオニストはこれらの土地に加えてハイファ地域やガリラヤ地域でも土地を買収し始めた。大規模な

買収契約の相手になったのはバイルト在住の不在地主だった。次いで、東方正教会の資産が、そしてパレスチナ人地主の土地が対象になった。土地がシオニストに売却されると、「ユダヤ人の労働者だけ」が耕作を許され、アラブ人の小作農は土地を追われていった。1930年代になると、土地を失ったアラブ農民は職を求めて、海岸地方に移動した。彼らは、ヤッファやハイファの町はずれに、バラック住宅をつくった（ギルモア 1983：63-67）。

4) パレスチナにおける商工業発展とユダヤ人市民の入植

「シオンの土地を耕す」ということをスローガンに始まったシオニストの運動も、第一次大戦までの移民数6.5万のうち実際に農業に入植したのは1.2万でしかなかったように、実態としてはヨーロッパの都市からパレスチナの都市への移動が主であった。最初は商人や職人、そして教師、医師、ついに企業家もあらわれる。このようなユダヤ人の都市生活は19世紀後半から始まるパレスチナの都市における商工業の発展によって支えられていた（富岡1993：133）。

5) イギリスの委任統治下

第一次大戦後、ユダヤ人の若者が東ヨーロッパからやってきた。第三波である（3.5万人）。1922年イギリスの委任統治がはじまった。1920年代は第四波の時代である。移民してきたユダヤ人は出身国、階層も多様化し、その数は8万人にのぼった。ユダヤ人の多くは中産階級に属する都市市民で、彼等は農業に従事するよりも都市で商業や繊維・農産物加工などを始めた。ヘブライ大学がエルサレムに（1925年）、その他水力発電所や化学プロジェクトなどができ、国内は建設ラッシュとなった。すでに18世紀以来パレスチナで起こっていた、オリーブ油、小麦、オレンジなどの生産、ナブルスの石鹸、ヘブロンガラス、ガザの綿織物がますます盛んになった（広河1987：33、ギルモア1985：45）。ワイツマンは「ユダヤ機関」を結成、委任統治政府はこれをユダヤ人の代表機関として承認した。

1920年代の都市の発展の結果、1931年のパレスチナの人口は近隣からの流入もあって85万人、うちユダヤ人人口は16万人（1930）になった

（広河1987：36）。

ハイファ南東のマルジュ平原における1920年代末のユダヤ人入植地の出現の状況を、藤田（1989：64-72）は次のように記している。

「1929年、丘陵の上にある村からマルジュ平原（現イスラエル平野）を遙かに見渡すと、平原の多くはユダヤ人所有地で占められており、平原のそこそこにはユダヤ人入植地が点在していた。それらは、“キブツ”、“モシャーフ”などと呼ばれる西欧的近代農場のたたずまいの集団農場で、入植地では酪農・養鶏・果物栽培など商業的農業が導入されていた。そうした光景はイギリス委任統治時代になってから出現したものである。この地は昔からの代表的な穀倉地帯で、5月の収穫期がやってくると、穀物は豊かに実り、刈り入れに忙しいアラブ農民の姿が見られたものだった。パレスチナ全体としては岩の多い土地柄で、不毛地も多く（1931年現在36%）、パレスチナ北部の穀物は食糧需要を支える上で欠かせなかった。マルジュ平原にとどまらず、西の地中海沿岸平野からヨルダン溪谷を経てティベリア湖の東のハウラン地方（現ゴラン高原）にかけての諸地域がパレスチナの穀倉地帯であった。1921-25年にかけてのマルジュ平原は、ユダヤ人の大々的な土地買い取りと引換えに、アラブの村々とアラブ農民が消えていくという、アラブ農民の激変の舞台となった。ユダヤ人諸機関がマルジュ平原に広がるスルスク家（レバノンのキリスト教徒商人）の土地20万ドーナム（2万ha）以上を、競売で買い取った。そこには22のアラブの村があり、アラブ小作農たちがいた。それらの村々のうち1村を除き農民たちは補償を受け取って立ち去り、村は廃村と化した。立ち去ったアラブ農民は1746家族で、その多数はアメリカへ、その他の農民たちもあらゆる所へ移住していった。ユダヤ人による大規模な土地買収はアラブ住民の猛反発を引き起こした。1925年にアフーラ村から最終的に住民が立ち去り、跡地にはユダヤ人入植地“アフラ”が誕生した。」現在のイスラエル平野は灌漑のパイプが敷き詰められた見事な沃野で、イスラエル最大の穀倉地帯となっている。

6) アラブの抵抗

1930年頃にはユダヤ人の移住は減少を見せていたが、その後ヒトラーが政権につくと、反ユダ

ヤ主義が猛威を振るいパレスチナへのユダヤ人の移住が急増した。第五波である。これに対し1936-39年にはアラブ大蜂起といわれるパレスチナ・アラブの反シオニズム運動が起った。アラブのテロ作戦に対して、ユダヤ人側は監視塔と防御柵を設けた新しいタイプのコロニーを作った（レヴィン1994：168）。ユダヤ人移住者は1931-35年に16.6万人、1936-40年に9.7万人となった。殺到したユダヤ人の土地購入とそれをめぐるアラブ農民との紛争が続出した。

7) イギリスによるユダヤ人移民制限

混乱が激しくなるなか、1937年イギリスから派遣されたピール委員会は「ガリラヤ地方はユダヤ人国家、エルサレム・ベツレヘムと海岸への回廊地域はイギリス統治地域、残りのパレスチナはトランス・ヨルダンと連合するアラブ人国家」という3分割案をまとめた（ギルモア1985：81）。ユダヤ人はこれを認めたが、パレスチナ人は徹底して反抗、内部分裂もあって抵抗運動は自滅していった。イギリスはパレスチナ人ぬきで、アラブ諸国の代表を集め、アラブ側の要望をとりいれた「白書」を発表した。移民に関しては「今後5年間は7万5千人のユダヤ人の移民を認めるが、以後はアラブ側の同意のない移民を認めない。」というものであった（富岡1993：150,153,157）。ユダヤ人たちがヒトラーの手をのがれてヨーロッパから脱出を始めたその時にユダヤ人の移民が止められてしまったのである。老朽船にすしづめになったユダヤ人がパレスチナの港で上陸を拒否され送り返された。しかし戦局が厳しくなると、ヨーロッパにおいて戦争難民となったユダヤ人のパレスチナへの移住はイギリスの官憲の弾圧のなか、強行された（レヴィン1994：166）。

3. イスラエル建国と領土の拡大

1) イスラエル建国とその領土

第二次大戦後、パレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人の対立はますます激しくなった。策つきたイギリスはパレスチナを放棄、解決を国連に委ねた。1947年、国連分割案が可決され、ユダヤ人の国・アラブ人の国・エルサレムとベツレヘムは国際管理ということになった。第3表と第3図に示すようにパレスチナの土地の6%しか所有していなかったユダヤ人が57%を得ることになっ

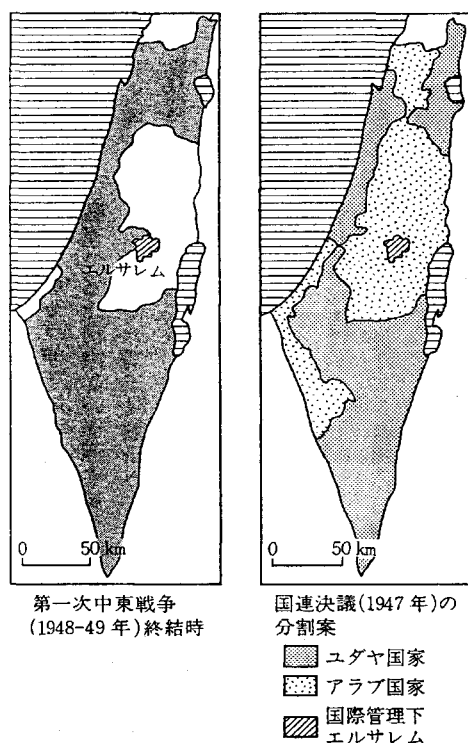
た。その中には東部ガリラヤ地方、海岸沿いの平野、イズレル平野、ヨルダン川沿いの豊かな農地、死海からアカバ湾に達するネゲブ地域のほとんどすべてが含まれていた。アラブ人に割り当てられた土地は、西部ガリラヤ地方、ヤッファの飛び地、ガザ地区、中部丘陵地帯のみであった。

国連決議を受けてイギリス軍が撤退するとたちまちエジプト・ヨルダンを中心とするアラブ連合軍がパレスチナに侵入した（第一次中東戦争）。アラブ側が敗北、1948年秋にはイスラエルは北部ではガリラヤの穀倉地帯の大部分、東部ではエルサレムの西側の確保に成功し、全体としては国

第3表 国連のパレスチナ分割案（1947年）

	ユダヤ人口	アラブ人口	人口合計	面積（平方km）
ユダヤ国	498	497	995	約 14,000
アラブ国	10	725	735	約 13,000
エルサレム（国際都市）	100	105	205	200
合計	608	1,327	1,935	27,200

人口単位：千人 （広河 1987：45）



第3図 イスラエルの国境変遷 広河 1987: 48

連分割案に定められた「領土」を大幅に拡大してパレスチナの80%を占め独立を確保した。そして国連に加盟した。これが我々が現在地図で見るイスラエルの領土である。

2) 領土の拡大と移民の流入

スエズ戦争で、ナセルが政治的に勝利を収めるとアラブとイスラエルの緊張は高まった。ついでシリアとイスラエルのヨルダン川の水争いを契機に、1967年第三次中東戦争がおこった。6日間にイスラエルはヨルダン川西岸・ガザ地区・シナイ半島・ゴラン高原を手にした。占領面積は領有面積の3倍を超えた。同年11月の国連安保理決議第242号は中東地域における平和維持のためイスラエル軍の占領地からの撤退を要求している。しかし、イスラエルは国連決議に耳を貸さず、占領地域の返還に応じることもなく現在に至っている。1979年のイスラエル・エジプト平和条約により、

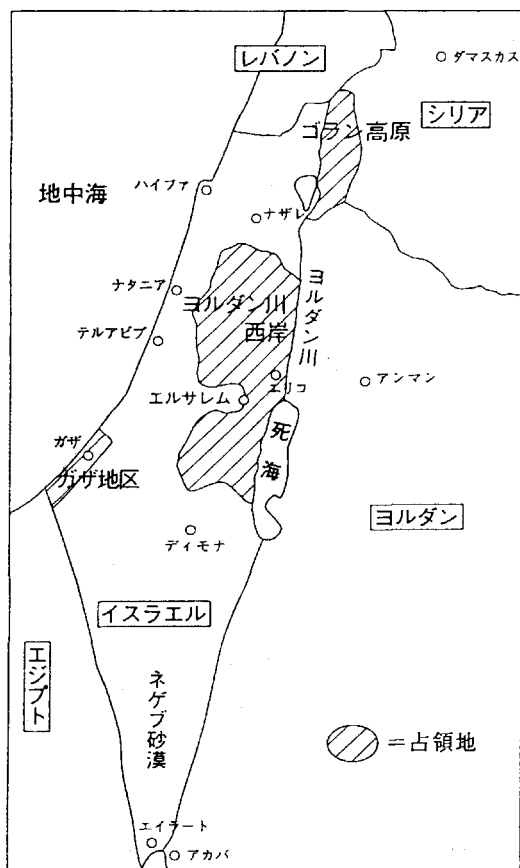
シナイ半島は返還された(第4図)。

イスラエルの独立が宣言されると、奔流のようにユダヤ人移民が流れ込んできた。独立当時わずか60万人ほどだったイスラエルのユダヤ人人口は翌1949年には100万人を突破した。多くのモシヤブが海岸平野南部および、エルサレム回廊に作られた(Atlas of Israel: 16)。それらは西岸地区西側グリーンライン(占領地境界)に沿っており、国境警備の目的を持っていた。第二次大戦後ナチスによるホロコーストの全貌が明らかになるにつれ、欧米諸国の間でユダヤ人に対する同情心が強まり、シオニズム支持の声が急速に大きくなった。イスラエルのユダヤ人人口は増加を続け、1962年には200万人となった。新政府は積極的にユダヤ人移民を受け入れた。1950年代以降はアシュケナジーとよばれる欧米系よりも東方・オリエント系(北アフリカ・中東のイスラム諸国にあった古代ユダヤ社会に起源を持つ人々)の移民が多くなっている(立山2000: 37-40)。1967年以後占領地に積極的な入植地建設が進められている。

3) イスラエル政府による土地接收

シオニズム運動は、ユダヤ人の入植運動の実践であり、土地接收は必然的なプロセスであった。初期にはユダヤ機関の資金による不在地主の土地買い上げによって入植が行われたが、イスラエル建国後はパレスチナ住民の追放と村落の破壊が「合法的」に行われた。まず難民となって各地に散ったパレスチナ人の土地は「所有者不在地」となって政府の管理下に入った。次に「安全保障上の理由」で「一時的に立ち退き」を命じられイスラエル内に残ったにもかかわらず結果的に土地を接收された場合も多い。彼等は「存在する不在者」と呼ばれた。接收された土地には、ユダヤ人入植地(キブツ・モシヤブ・地方都市)が建設された。入植地の鉄条網の内側に住むユダヤ人、鉄条網の外側に住むパレスチナ人、入植者数の増大は2つの異なるコミュニティを作り出している。入植地が広がるにつれ、隣接するパレスチナ人のオリーブ畑やブドウ園が確実に削られている(立山1989: 106-109)。

1993年現在、ヨルダン川西岸とガザ地区には154の入植地がある(第4表)。ゴラン高原の35を加えると1967年以来189の入植地が建設されたことになる。入植者人口もベット・タウン型の多



第4図 イスラエル占領地 立山2000: 10

第4表 入植地数と入植者数 1993年12月現在

	西岸	ガザ	ゴラン高原
入植地(ヶ所)	136	18	35
入植者(人)	111,600	4,800	12,600

(立山 1995: 115)

い西岸では11.2万人を数え、農業入植者の多いガザ地区で4.8千人、ゴラン高原で1.3万人である。1977年リクード政権が成立すると入植活動はさらに加速された。ベッドタウンのような大規模入植地が次々に建設され、入植人口はウナギ登りに増え続けた(立山1995: 115-118)。1987年には西岸の52%, ガザ地区の30%の土地がユダヤ人の管理に移った(マクドワル1992: 139)。

4) ロシアからの新移民

1990年代、イスラエル社会を大きく変えたものはロシア系移民の急増であった。冷戦時代200万とも300万ともいわれたソ連のユダヤ人は、出国の自由を厳しく制限されていた。ゴルバチョフの新思考外交以来、ユダヤ人の出国制限が徐々に緩和され、1989年からは完全に自由になった。「ゴルバチョフのペレストロイカが皮肉にも反ユダヤ主義を吹き出させる結果を招いた(土井1991: 69)」ともいわれる。長年の願いがかなってやっと出国できたユダヤ人は、アメリカが難民の数を制限したため大挙してイスラエルに向かった。1989年1月には248人だったソ連からの新移民数は1990年1年間で18.4万人になった。控えめな予測でも1995年末までの5年間に75万人が流入すると考えられた。この膨大な新移民をどのようにうまく吸収するか。住宅の建設、教育施設の拡充、雇用の創出などいずれも緊急を要する大問題であった。東エルサレムを含む占領地内の入植地でユダヤ人住宅の建設が活発化した。入植活動の活発化はパレスチナ人の不安を駆り立てた(立山1995: 7-9)。

1999年で約90万人に達した旧ソ連からの移民は「宗教」よりも「豊かな生活」を求めてやってきた人々で、約7割は非宗教的というよりも反宗教的である。正統派ユダヤ教徒は2-3%にすぎない。技術者や教育程度の高い労働者が多く、90年代以降のハイテク産業の躍進を支えたと言われている。彼等はシオニズムともユダヤ教ともつながりが薄く、むしろ自分たちの伝統・文化を保とうとしている新しい集団である(『朝日新聞』

1997.11.14付)。しかし、住宅不足と失業が大きな問題になっている。ロシア人は都市から離れた入植地に住もうとしないし、高学歴の彼らに肉体的労働しか見つからないと言う現状がある(高橋2001: 56)。

4. パレスチナアラブの人々—イスラエル建国の陰で

1) パレスチナ難民

第一次中東戦争の際に、多くのパレスチナ人が難民となった。「48年難民」である。1949年の国連報告によると71.1万を数える。アラブ人口の60%が流出したことになる。消えたパレスチナ人の村は374、全体の47%になる。彼等は周辺の国々で難民キャンプでの暮らしを余儀なくされており、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)が1950年から食糧配給や医療・教育など救済活動にあたっている。1967年の第三次中東戦争で、ヨルダン川西岸とガザにいたパレスチナ難民のうち約19万が再度難民としてヨルダン川東岸に移動した。西岸とガザにもともと住んでいたパレスチナ人のうち20万もヨルダン川東岸へ流入した。「67年難民」の発生である。ヨルダン川東岸へ逃げてきたパレスチナ人の数はその他も含め74万になった。当時東岸(ヨルダン)の人口は約200万でその1/3にあたり、ヨルダンの政情は不安定となった(立山1989: 50-51, 土井1995: 6)。1988年のパレスチナ難民の総数は約350万にのぼる(『朝日新聞』1998.4.29付)。うち約100万人が現在もおおきくキャンプ暮らしを余儀なくされている。難民生活は50年になる。近年67年難民の帰還権については協議が始まっているが、48年難民については一切行われていない(立山1995: 157)。

これら難民を含めたパレスチナ人全体の人口は、1993年現在でヨルダンに約185万人、西岸と東エルサレムに約115万人、ガザ地区に約80万人、その他イスラエル内に約78万人、レバノンに約36万人、シリアに約33万人、他のアラブ諸国に約45万人、他の世界各地に45万人などで合計約617万人といわれる(土井1995: 7)。

2) イスラエルのパレスチナ人

第一次中東戦争で、多くのパレスチナ人が難民となったが、約15万人はそのまま自分たちの村

や町に残り、国籍上は「イスラエル国民」となり、現在「アラブ系イスラエル市民」とよばれる(立山1995:124)。最近ではイスラエル・パレスチナ人の呼称が一般的になっているという。すでに示したように1997年現在、イスラエルに住む「非ユダヤ人」は合計110万(うちイスラム教徒86.8万)人で、全人口の約20%を占めている。

イスラム教徒であるパレスチナ人のほとんどはガリラヤ地方とヨルダン川西岸北東部の境界地域「小三角地帯」(ワディアラ付近)に住んでいる。パレスチナ人居住地域は、1966年までの軍政こそ廃止されたがユダヤ人社会のそれと同じではない。教育、雇用機会や賃金などさまざまな面で差別されている。政府による土地の接収が行われることも多い。参政権など原則的にはユダヤ人と同じ権利を持っているが、彼は自らを「二流市民」ととらえている(立山1989:121-122)。

3) 占領地ヨルダン川西岸・ガザの人々の暮らし

ヨルダン川西岸およびガザの被占領民の暮らしは、身分証明書(IDカード)の取得を初め、新聞の検閲、諸許認可など占領当局の権力をあらゆる面に受けている。反占領活動に対しては徹底的に厳しい措置がとられる。西岸のアラブ人はヨルダンの国籍を持っているが、ガザの人々には国籍は与えられていない。両地区のパレスチナ住民でイスラエル内に就業しているのは約10万人、うち正規の手続きを経て雇用されている労働者はその半数、その他は日雇労働者である。1970年代アラブ産油国のオイルブーム時は出稼ぎ労働者の送金や外部からの援助がこの地域を豊かにしたが、1980年代中頃からのアラブ産油国の経済悪化により、パレスチナ人の出稼ぎの道は閉ざされた。イスラエルが工業化を押さえていることもあって、両地域の経済は依然として農業が主体である。しかし、水資源の管理配分は占領当局が支配していて、灌漑施設の独自の開発はほとんど行われず、井戸を持っていたとしても汲み上げる水の量は制限されている(立山1989:103-104)。

パレスチナ人の抵抗運動「インティファダ(蜂起)」は1987年ガザではじまり、西岸地域に広がった。インティファダと1990年からの湾岸危機・戦争は西岸・ガザ経済に大きなダメージを与えた。イスラエルによる西岸・ガザの封鎖、出稼ぎ者送金の壊滅、湾岸アラブ産油国の財政援

助うち切りなどがそれである。

4) 中東和平の行方

経済的に窮地に陥ったPLOとインティファダ以来和平を望む声があがってきたイスラエルが、アメリカ主導の和平交渉に望むことになった。1991年マドリッドで中東和平国際会議が開かれ、イスラエルとアラブ・パレスチナ代表がはじめて直接交渉の場に立った。その後PLOとイスラエルの間に交渉が進み、1993年にはオスロ合意が成立した。しかし、イスラエルの政権交代もあって、撤兵はなかなか進まず、交渉は難航を極めた。2000年9月、エルサレムでの衝突(リクード党首シャロン、イスラム聖域へ入る)から事態は大きく転換した。アメリカではクリントンに代わって2001年1月共和党のブッシュ政権が誕生、一方イスラエルの選挙ではリクードのシャロン政権が登場、中東和平は後退してしまった。2001年9月、アメリカにおける同時多発テロ発生、アメリカによるアフガニスタン攻撃・テロ戦争の流れの中で、中東においてもテロ対決が表面化し、パレスチナ人の自爆テロ、イスラエル軍の報復攻撃が続いている。

II イスラエルの現在：現地での見聞から

1) イスラエルへの入国

我々は、シナイ半島をエジプトのバスで横断し、アカバ湾から陸路イスラエルに入った。いよいよ国境タバである。エジプト側からイスラエル側へ、バスを降りてそれぞれ荷物を引いて歩いて国境を越える。エジプトのバスとはここでお別れ、これからカイロに戻るといふ。検問所に入った我々は非常に綿密な検査を受けることになる。若い男性は特に厳しく荷物をあけて中身まで入念に点検された。一人また一人とようやく出てくる。35名全員のチェックが無事終了したのは1時間後だった。「国境がある」ことを実感させられたひとときだった。

イスラエル側には、立派な観光バスとユダヤ人運転手、そして日本人ガイド榊原氏が待っていてくれた。「びっくりなさったでしょう。国境チェックがこのように嚴重だからイスラエルは安全なのです。」在住27年という榊原氏の言である。氏は非常に意欲的な方で我々の欲張りな要望によく

応えて下さり、充実した旅となった。配られたイスラエルの地図は占領地を含むものであった。よく見るとパレスチナ完全自治区と行政権のみの自治区が色分けして書かれており、国の中に複雑に入り組んでいる。占領地を区分するグリーンラインはそこにはない。ヨルダン川西岸はユダとサマリアという聖書時代の呼び方にかえられ、ガザとともに占領地は「行政管理地区」となっている。我々は黄色のナンバープレート（西岸地区は青、ガザ地区は白）をつけたイスラエルのバスで、これからこの国をゆくのである。土地を追われたパレスチナ難民の悲しみに接することは、ない。しかし、この国の風景は我々に様々なことを語ってくれるであろう。

2) マサダ要塞：イスラエルの聖地

死海のほとりエンボケックから北10 km余り、断層が続く死海西岸に四周を断層に限られ菱形の形をした比高400 m（海拔0 m）の台地、これがマサダの遺跡である（写真1）。100BC頃要塞が築かれたが、その後、ヘロデ王（37-4BC）がここに豪華な冬の宮殿を建てた。このマサダがユダヤ人にとって大きな意味を持つのは、70ADローマ軍により追いつめられた最後のユダヤ人960人が全員自決した地だからである。彼等はここに立てこもり、2年以上の攻防の末ローマ軍に破れた。この事件は生き残った7名の婦女子によって語り伝えられ、ヨセフスの「ユダヤ戦記」に詳しく記されている。

「ノーモア・マサダ（マサダは二度と陥落させない）」というスローガンはシオニズムと結びつ

き、イスラエル建国後はこの地がナショナリズムの聖地となった。国民皆兵のイスラエルでは、18歳になると男子は3年、女子は2年の義務兵役がある。その後男子は55歳まで、女子は25歳まで（未婚者のみ）予備役として年間一定の訓練がある。これはイスラム教徒には適用されない（ドルーズ人を除く）。新兵の入隊宣誓式は早朝にマサダに登ることで始まり、「ノーモア・マサダ」で締め括られるという。それだけではない。現地の日本人ガイド・榊原氏によると、小学6年生の修学旅行は親同伴でこの地にやって来て夜空いっばいに繰り広げられる光と音のショーでイスラエルの歴史を学び、そして明け方みんなマサダに登るという。氏自身も父親として参加されたとか。厳しい状況の中で建国したイスラエル国家への忠誠はこのようにしていまも育まれているのである。

我々は、1970年完成したというケーブルカーであつという間に山頂に着いた。ヘロデ王の宮殿の巨大な遺跡群が続く。貯水槽、食料庫、サウナ設備、宮殿などなど。カラフルなモザイクや壁画もある。周囲を見下ろすと、ローマ軍の陣営の跡とされる四角の石の列が要塞を取り囲んでいる。西側にはローマ軍が突破作戦のために作った斜道が張り付いている。東側には死海が広がる。現在頂上には近代的トイレ設備、休憩所なども備わっていて観光客も多い。歩いたのは頂上だけとはいえ我々にとっては暑い厳しい行軍であった。

3) キブツ・アルモク；占領地ヨルダン川西岸のキブツ

死海の西岸をゆく国道90号（ユダヤ人通行路。



写真1
マサダ要塞から死海を望む

パレスチナ人集落を結ぶパレスチナ人通行路は別にある)は、「ダビデの泉」として知られるオアシス・エンゲディを過ぎたところでグリーンラインを越えるはずである。しかし境界を示すものはない。我々は西岸地区に入ったのである。一方ガザ地区は、地図で見ると限り周囲をがっちりと道路が取り巻き検問所がある。

死海の北のはずれに近い所にキブツ・アルモクはあった。砂漠の中によく手入れされたなつめやしや綿花の畑が広がる。このキブツが出来たのは1979年、もとは1968年以降ヨルダン溪谷に沿って作られた軍事入植地の一つであった。案内者ウディ氏(27歳)は希望を秘めた瞳を持つういういしい若者だった。このキブツには60人の大人と60人の子供がいる。家族は17で、他はシングルである。最年長は45歳と若い。耕地面積についてはよくわからない。砂漠を農地にするのは大変だった。水をかけて塩を抜き、石を除く。何年もかかる作業である。現在、なつめやし・バナナ・グアバなどいろんな植物を試している。なつめやしは約千本あり、ヨーロッパに輸出している。畑にはすいか・たまねぎ・カボチャを植えている。4年前から新しい居住区も完成した。「砂漠を緑に」をスローガンに予算の25%を水に当てている。水はエリコの泉より引いている。

背後の高台に登って見下ろすと、キブツの周り一面の岩砂漠で、バラ線が周りを囲ったいる。説明者によると、動物が来たり、ベドウィンが入って来たりするからとのこと。「ソドム(低地)にはユダヤ人は住んではならぬと言われていた。キブツを作るとき反対もあったが、積極的に国を作りたいという情熱があった。1948年に住んでいたユダヤ人は追い出されたが、1967年以降この地に約千人のユダヤ人が戻ってきた。将来は1万人にしたいと思う。」ウディ氏の意見である。

4) キブツ・ギノサル: 1930年代からのキブツ

ガリラヤ湖は水深54mと浅いがイスラエル最大の淡水湖である。標高は-212m、死海よりはずいぶん高い。キリスト教徒にとってはイエスの伝道の舞台である。西岸にある中心地ティベリアはローマ時代からの町で、城壁やローマ浴場の跡が今も残っている。

ティベリアの約7km北に我らの宿舎キブツ・ギノサルはあった。このキブツは1937年の創設

である。当時の様子をパンフレットによって見てみよう。「最初の建物はギノサル草原に一時的なものとして建てられ、これは見張り塔や家畜小屋を含む“ホマ・ウ・ミグダル”として知られる全国的な居住プロジェクトの一部でした。その当時はアラブ人のテロリストが至るところでユダヤ人集落を攻撃していましたので、これらの建物は二重の堀で囲まれ、そびえる見張り塔からは周囲の風景が一望できるようになっていました。この夢に満ちた若い開拓者のグループは沼地を乾かし、果樹園を作り、祖先伝来の祖国に住むユダヤ人の復興を助けました。」このキブツでは現在大人350人、子供250人計700人が生活している。農業を主としており、バナナ・柑橘類・小麦・綿花・牧草の栽培のほか、酪農・養鶏・漁業(鱒の養殖)も行っている。1964年にはギノサルホテルがオープン、1971年には「アガル」という名の電気機器プラントも発足した。我々もそのホテルの客となったのである。現在、キブツの収入の65%がホテルのそれで、農業ほかは35%に過ぎないという。

キブツ内を見学する。共同生活の極みを示す洗濯棟、各家の名前を書いた洗濯物の大きな袋が洗濯舎の前に並んでいる。洗濯係の人々によって洗い上げられ、各戸に届けられるという。かえって大変なのではないかと心配するのは個人主義社会の人間の妄想だろうか。そして、共同の食堂、夫婦の家、子供部屋(初期の頃は子供は親と離れて暮らしていたが、最近は18歳まで親と一緒に昼間のみの保育園?)などを見る。片隅にシェルターの入り口があった。緊張の中で開拓してきたこの地域の現実に触れる思いがした。

夜は会議室で広報担当の女性カトリーナさんから話を聞く。彼女自身1974年オランダからやって来てキブツの男性と結婚、3人の子の母である。子供達は14歳までキブツ内の学校で教育され、15歳になると、ヨルダン溪谷の学校へ行く。1940年代はキブツが一丸となり全体のことを考える傾向が強かったが、現在はそれが変わりつつあり、個人・家族のことを考えるようになっていく。1985年からは親子と一緒に生活するようになった。このキブツに新しく入ってくる人は40%、別の仕事を求めて出ていく人が60%で、人口は減少しつつある。「キブツは孤立しているのではなく、外の世界との融和は常に考えられて

いる。基本は民主主義社会なのである。」と強調された。“農業生活共同体”，“原始共産主義”という初期の情熱は薄れ、キブツは資本主義的小市民の大量移民によって作られた資本主義体制の中で取り残された「社会主義社会」といった軋轢に悩んでいるように思われた。

1909年、最初のキブツ・デガニアがロシアからの人々によってガリラヤ湖南岸に作られて以来、キブツは第5表に見るように増加、現在270、所属人口は12.6万である。キブツ資料によると、地域的にはネゲブが最も多く、ついでガリラヤ・中央部が続く。人口規模は300人から600人程度が半数であるが、1000人以上もある。産業別に見ると、農業と漁業が主で、男子労働力の37%、ついで工業が32%となる。工業の内容は最大がプラスチック次いで食品加工、金属製品などである。農業では灌漑地の4割、酪農関係で4割、養魚地ではほとんどを占める。

1970年代になると生活のゆとりも生まれ、伝統的なキブツに変化が見られるようになった。一

つは親子同居が始まり、食事も家庭でとることが増えたことである。1997年からハイファに近いキブツでカード制が採り入れられ、食事や日用品の購入を個人別にカードに記入するようになった。最近では半数近くのキブツでカード制が行われている。もう一つはメンバーの学歴が上がり、キブツの外に仕事を求める人が増えたことである。「この傾向はまだ一部である。」と説明書は述べているが、1991年をピークにキブツ人口は減少している。

5) ギラン高原：占領地ギラン

バスはギラン高原へと向かう。緩やかな坂道を登っていくと、なだらかな高原が開ける。この地域は、1948年のパレスチナ戦争でシリアが握り、1967年の第三次中東戦争ではイスラエルが拡大した占領地の一つである。1974年の第四次中東戦争でシリアが一時占領した。1981年にはイスラエルが併合宣言をしている。ギラン高原北部のヘルモン山（2814 m、11-3月間冠雪）からの雪解け水がバニアス川となって流れ出しており、ヨルダン川となってガリラヤ湖に注ぐ。イスラエルの水資源の30%を供給している地域である。ギラン高原には現在、ユダヤ人1.3万、ドルーズ派1.5万（1994）が住んでいる。ユダヤ人入植地は35、うち10はキブツである。

車が進んでいくと、あちこちに破壊された建物、壊れた戦車がそのまま残っている（写真2）。850 mの高原にはガレキの間にオリーブ畑が広がっている。クネイトラの町を見下ろす地点に立つ。立て看板によると、「クネイトラの町は1967年の戦

第5表 キブツ人口の推移

年次	キブツ数	人口
1920	12	805
1940	82	26,550
1950	214	67,550
1970	229	85,100
1990	270	125,100
1991	270	129,300
1993	270	126,100

（「キブツ連合運動」資料1995）

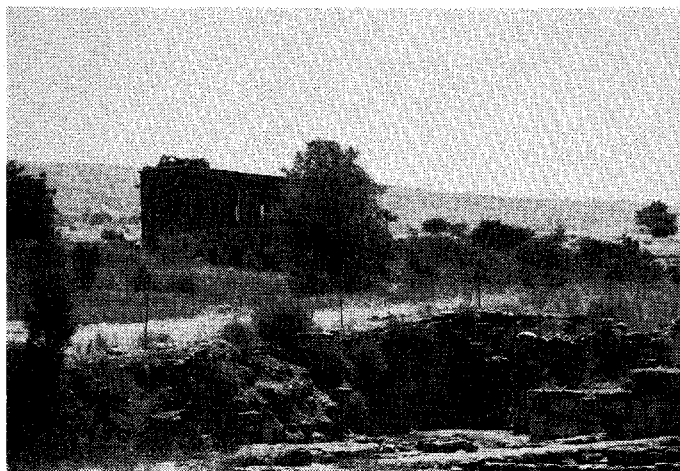


写真2
ギラン高原の廃墟

争時にシリアが放棄したが、1974年の兵力引き離し協定でイスラエルがシリアに返還した。現在国境がこの町を通っている。」眼前に広がるクネイトラの谷のイスラエル側にりんご園が広がっていた。その向こう、軍事境界線に沿って非武装地帯があり、国連監視軍の兵舎が見える。日本のPKOもここに参加しているそうである。青い空のもと、国境の谷は平和そのものに見えた。

国境の高台から南西に下がって来たところにカズリンという町がある。1977年にゴラン高原の中心都市として作られた新しい町である。町の東部にゴランハイツ・ワイナリーはあった。周囲にはぶどう畑が広がる。パンフレットによれば、この工場は1983年に4つのキブツと4つのモシャブの共同経営として出発した。ぶどう栽培は1976年頃からである。現在畑は490ha、ゴラン高原に11ヶ所、ガリラヤ地方に3ヶ所ある。従業員は60名とのこと。ワイン生産量は30万ケース、それはイスラエル国内市場の18%、イスラエルワイン輸出の38%を占める。銘柄はヤルデン・ガムラ・ゴランで評判もなかなかのようである。試飲室での参加者の顔は満足げであった。

6) エルサレムのまち：ユダヤ教とキリスト教とイスラム教と

海岸の中心都市テルアビブから高速道路を経てエルサレムへ「登る」。約60 kmの道のりである。乾燥した丘が次々に現れる(写真3)。斜面にオリーブの段々畑があるが、水不足からか荒れている。その向こうにミナレットが立っている。アラブ人の村である。次の丘にはレンガ色の屋根と白

い壁を持った家々が整然と並んでいる。ユダヤ人の入植地である。アラブの村、ユダヤの村が象嵌されている。あらためてこの地域の宿命を感じる。坂を登り切った所で黄金のドームが見えてくる。エルサレムである。

マウント・スコープ、マウント・オリーブなど800 m級の峰が南北に連なる西側にエルサレムの町は広がる。マウント・オリーブ山から東側を見ると、ヨルダン地溝帯に鋭く落ち込む瓦礫の岩漠で、岩陰にベドウィンの小屋が見える。

一辺1 kmの四角形の城壁に囲まれた旧市街は、黄金のドームがきらめくイスラム教の岩のドームモスク、ユダヤ教の嘆きの壁、キリスト教の聖墳墓教会など三大宗教の聖地が重なりあい、ひしめきあっているところである。1967年の第三次中東戦争で、イスラエルは旧市街を含む東エルサレムを占領した。ユダヤ教の聖地である「嘆きの壁」の前は大きな広場に変えられ、そこにあった建物はすべて破壊され、住んでいた600人のパレスチナ人は追放された(ギルモア1985: 11)。エルサレムを東西に分割していた休戦ラインも今はない。イスラエル政府は1980年にエルサレム全域を「永遠かつ分割されない首都」として領土に併合することを宣言した。国会議事堂や大統領官邸をおいているが、国際的には首都としては未承認で、諸外国大使館はそのままテルアビブにある。

エルサレムの人口は現在約60万人、うちアラブ人が1/3 (20万人)、ユダヤ人が2/3 (40万人)、ユダヤ人のうち半分が超正統派ユダヤ教徒の人々である。彼等は、律法を守って生活している人々で、いつも黒い山高帽をかぶり、丈の長いフロッ

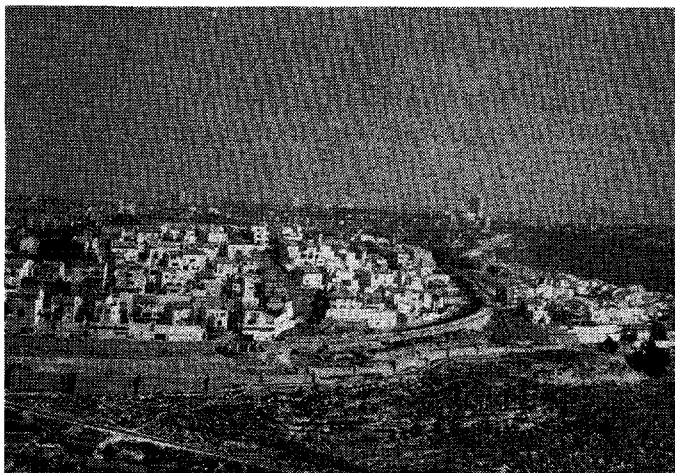


写真3

ユダヤ入植地とアラブ人の
オリーブ畑

クコートと白いシャツを着ている。

金曜日の日没から土曜日の日没まではユダヤ教の安息日（シャバト）である。ユダヤ人の店は閉店となる。厳しくは火も使わないとのことであるが、さすがにホテルでは普通の食事が出る。しかし、エレベーターは「シャバト仕様」になっており、ボタンを押す（仕事をする）ことはできない。各階止まりなのである。ちょうどその日、我々は「嘆きの壁」の前に立った。沢山のユダヤ人が壁に向かってお祈りを捧げていた。われわれは説明を聞きながら、メモをとることも、もちろん写真を撮ることも許されなかった。

Ⅲ. 結 び

三大宗教の聖地エルサレムを持つパレスチナの地、イギリスの二枚舌外交のもたらしたアラブとイスラエルの対立の中でのイスラエル建国、その背景にユダヤ人のボグロム、ホロコーストの悲劇が重なる。現実には目を向けると、パレスチナ・アラブ人社会にユダヤ人が「神から約束された土地」として入植、戦乱の中でアラブ人を排除しながら領土を拡大して建国、イスラエルは現在も国連決議を無視したまま占領地域に入植地を拡大中という状況である。中東地域で国民国家が形成されてきた中で、狭間に残されたパレスチナ・アラブの民族自決権をいかに認めていくか。ホロコーストの犠牲者としてのユダヤ人、イスラエル建国の犠牲者としてのパレスチナ人、歴史に翻弄された二つの民族がこの地でいかに共存の道を探っていくか、和平交渉は1993年のオスロ合意以来進むかに見えたが、アメリカでの同時多発テロ以後イスラエルとアラブの抗争は激しくなっている。

謝辞

「金坂清則先生（京大教授）と歩くカイロ～シナイ半島イスラエル乾燥気候帯を巡る地理体験の旅、1999帝国書院」に参加させて頂きましたことを感謝します。

引用文献

立山良司（2000）『揺れるユダヤ人国家』文春新書

- 広河隆一（1987）『パレスチナ』岩波新書
デービット・ギルモア、北村文夫訳（1985）『パレスチナ人の歴史』新評論
大岩川和正（1983）『現代イスラエルの社会経済構造』東京大学出版会
メイヤ・レヴィン、岳真也・武者圭子訳（1994）『イスラエル建国物語』ミルトス
富岡倍雄（1993）『パレスチナ問題の歴史と国民国家』明石書店
ダヴィッド・マクトワル、奥田暁子訳（1992）『パレスチナとイスラエル』三一書房
藤田進（1989）『新しい世界史12・蘇るパレスチナ』東京大学出版会
立山良司（1989）『イスラエルとパレスチナ』中公新書
立山良司（1995）『中東和平の行方』中公新書
土井俊邦（1991）『アメリカのユダヤ人』岩波新書
高橋和夫（2001）『アフガニスタンの影でーアメリカとパレスチナ問題』角川書店
土井敏邦（1995）『和平合意とパレスチナ』朝日新聞社
マーティン・ギルバート、池田智訳（2000）『ユダヤ人の歴史地図』明石書店
The survey of Israel Tel-Aviv and Mackmillan publishing Co. New York（1985）*Atlas of Israel*, Collier Mackmillan Publishers London

参考文献

- デヴィット・K・シプラー、千本健一郎訳（1990）『アラブ人とユダヤ人』朝日新聞社
及川博一（1986）『イスラエルの国と人』時事通信社
イスラエル・インフォメーションセンター（1997）『イスラエルという国』
松本仁一（1995）『ユダヤ人とパレスチナ人』朝日新聞社
村山磐（1967）『エルサレム』古今書院
藤村信（1997）『中東現代史』岩波新書
広河隆一（1998）『パレスチナ難民キャンプの瓦礫の中で』草思社
エドワード・サイード、四方田犬彦訳（1999）『パレスチナへ帰る』作品社
Moshe Kerm（1994）*The kibbutz*, Palphot Herzlia

Israel

Reserch and Documentation Center of United Kibutz
Movement (1995) *Institution of higher learning of
the kibbutz movement*, Yad Tabenkin

こいけ・とみこ
駒澤大学非常勤講師

The development of Jewish settlements in Israel

Tomiko KOIKE

Part-time lecturer, Komazawa University

In this report, I will explain on the Jew immigration into Palestine from regional point of view. The report consists of 2 parts; the history of the Jew immigration process to Palestine and the present circumstances of Israel. The description of this short report depends on many books concerning of this area and the short visit in 1999 just before the present difficult situation.

The purpose of this report is as follows. Many journalists have reported on the Middle East, the most changeable area in the world. But there are a few reports dealt with the process of Jew immigration into Palestine from the regional point of view. My report researches the process of Jew immigration to Palestine as "a struggle for land".

At first, Jew immigrants bought the land in the northern part of Palestine from arabic landowners. Then they organized the modern agricultural communities so-called *Kibbutz* and *Moshav*, and, therefore, Palestine tenants lost their farms. Next Jew people immigrated to towns and cities in Palestine. After the foundation of Israel in 1948, the government extended its territory by the wars. The Palestine people were forced to move from their home land and became to be refugees.

Some new data by my short visit as a member of study tour for geographical teachers show the present circumstance of Israel. This tour continued from Cairo to Tel Aviv via Sinai peninsula, western coast of the Dead Sea, Masada fort ruins, some *Kibbutzes*, the Golan highland, Jerusalem and etc. We saw new rich villages of Jew and arabic poor olive fields.

Jew people came to Palestine after the long suffering from Pogrom and Holocaust. On the other hand, Palestine people were lost their home land by the Jew invasion. I think these two people are victims of historical inevitable incidents. It is the worldwide issue how to coexistence for them.